



インタビュー

カンブルランが語る
読響との9年の軌跡

カンブルランは、今月で読響常任指揮者の任期を終えます。昨秋、2時間にわたってインタビューを行い、読響との9年間のこと、今後の抱負などを語っていただきました。（聞き手：事務局）

— 常任指揮者の退任が近づいています。今はどのような心境ですか？

就任した2010年を振り返ると、随分昔のことに感じると同時に、つい最近のことのように鮮明な記憶も蘇ります。常任指揮者の依頼を頂いた08年頃は、私がパリ・オペラ座との5年の契約を終える時期。当時、総裁のジェラルド・モルティエ氏と共に、面白いプロダクションを作っていましたが、残念ながら楽団や批評家と上手くいきませんでした。一方、南西ドイツ放送SWR響との良好な関係を築いていました。そんな時に日本に来ることが決まりました。以来、今までひたすらに、先のことだけを見続けて取り組んできました。

— 10年はマエストロが61歳の時。アジアでの初めてのポストでした。

当時、私は母国フランスでのキャリアを辞めようと思っていました。1981年から王立モネ劇場で音楽監督を務め、米国やドイツでも指揮しました。アジアに初めて来たのは79年、リヨン国立管とのツアーで、セルジュ・ボド氏のアシスタントとして来日したのです。その後、06年に久々に来日し、読響に客演。その初共演が非常に良い感触でした。読響から常任の話が来た時、モルティエ氏に相談したら、「冒険心の強いシルヴァン、日本へ行くべき。新たな世界で新しい経験を積むべきだ」と強く薦められ、私は決まりました。不安はなかったです。

— 10年の就任から最初の2～3シーズンを振り返っていただけますか？

読響には、常に高いポテンシャルを持つ楽団という印象があり、もっと良くなると感じていました。一方で、古いスタイルを変えるのに苦労していた楽団員も一部にいました。しかし演奏を通して、少しずつ良くなりました。最初の3年は、変化を追求した時期で、読響が向上するために、長いスパンで何をすべきかを考えました。楽しい挑戦でした。また、お客様の好奇心を掻き立てる選曲も心がけました。2シーズン目の11年9月、重要な作品であるベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉で大きな成功を収め、私たちに自信が付きしました。12年8月、原爆忌の広島・長崎公演も印象深いもの。自分の内面と向かい、精神が浄化されるような特別な公演となり、俳優・吉川晃司氏の朗読に楽団員や合唱団の皆で涙しました。

— 11年3月の震災後、マエストロは予定を早めて4月に来日してくれました。

当たり前のことをしただけです。当時、原発を恐れて来日に反対した人も周囲にいましたが、弟でティンパニ奏者のブノワが「シルヴァンにとって読響は、子どもや家族のような存在なのだから一緒にいるべき」と説得してくれました。私にとって読響はすでに生

活の一部でしたので、迷わず来日しました。多くを学んだ時期で、日本人の災害に向き合う姿勢や謙虚さに心打られました。今でも感情が揺さぶられます。人間が辛いことに直面した時に、どのようにそれを克服するのか、そして自分には何かできるのかと考えました。

— 「変化」の時期を経て、次の段階へと進みます。

12年10月、現代作曲家であるツェンダーと細川俊夫作品による演奏会がポイントとなり、第2期へ。13年3月にはマーラー〈悲劇的〉で手ごたえを感じ、読響との絆が深まりました。13年9月に行ったブリテン、ウストヴォーリスカヤ、ストラヴィンスキーのプログラムも記憶に残っています。ブリテン〈シンフォニア・ダ・レクイエム〉を演奏後、当時ソロ・チェロの毛利伯郎さんが近寄ってきて、「この曲の魅力を発見し、強く感動した」と語ってくれました。13年9月、2度目のストラヴィンスキー〈春の祭典〉では、この3年の成長が実感できました。

しかし、悲しいことが起こりました。人生を共に歩んできたモルティエ氏の死です。彼は13年12月まで元気でしたが、翌1月、病気で体調を崩しました。そんな中、私は来日してソロ・ヴィオラの鈴木康浩さんとベルリ

オーズ〈イタリアのハロルド〉などを演奏。精神的にも厳しかったですが、どうにか自分を奮い立たせました。そして、14年3月にモルティエ氏が亡くなりました。翌4月に来日し、マーラー第4番などを演奏しましたが、私はまだ深い悲しみの中にいました。

——15年3月には欧州ツアーに行き、9月のワーグナー〈トリスタンとイゾルデ〉へと向かいます。

欧州ツアーでは、特にワルシャワ公演が印象深かったです。聴衆の温かさ、素晴らしさは忘れられません。アイヴズとドヴォルザークを組み合わせた試みに熱心に耳を傾けてくれました。そして、9月の〈トリスタン〉へ。読響とは初めてのオペラ作品でしたが、楽団員の集中力も高く、大きな成功を収めました。15年からブルックナーにも取り組み、マーラー〈夜の歌〉も演奏するなど、大きな編成の作品が増えましたが、これらの大曲でも高い質を保てました。その秘訣は、大曲においても室内乐的なアンサンブルを確立していたことです。ハイドンやベートーヴェンなどを演奏することを通して、読響がそれを習得していました。

この12年10月以降の第2期は、古典から現代作品まで、様々なスタイルの作品で忠実に音楽作りをし、その経験が積み重なってきた時期。細部への

取り組みを大切にし、深めていきました。優秀な新団員の加入も力になりました。〈トリスタン〉の成功後、すぐにメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉を行うことを決断。この大作を成功に導けると確信できたのです。

——いよいよメシアン〈アッシジ〉へ向けての第3期になります。

手ごたえを感じたのは、17年1月のメシアン〈彼方の閃光〉。なぜなら〈閃光〉の音楽は、〈アッシジ〉の要素を含んでいたからです。4月のバルトーク〈青ひげ公の城〉も、難しい作品ですが良い出来でした。さらに読響は10月に新国立劇場主催のワーグナー〈神々の黄昏〉への出演などを通して、長時間の演奏でも集中力を保つ力を備えていました。〈アッシジ〉の成功の秘訣の一つは、リハーサル時間の組み方。この大作を演奏するには、十分な練習が必要だということを、事務局が理解してくれました。そして何より大きな要因は、皆がそれぞれの最善を尽くしてくれたこと。分奏から始まって、オーケストラ練習、合唱や歌手リハーサル、全体練習と、全てが成功に向かって一丸となって動きました。私にとっては五つ目の〈アッシジ〉のプロダクションでしたが、その中でベストの演奏でした。



2017年11月26日 メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演から ©読響

——マエストロの人生の中で、読響とはどんな存在でしょうか？

私の人生における大きな贈り物であり、私の「今」の姿を表す存在です。読響とは100%信頼を委ねられる関係が築けました。今は、私のあらゆる音作りに、皆が全力で応えようとしています。そうさせたのは「愛」。9年間、音楽の楽しさ、音楽から得られる充実感を共有できたことは嬉しい限りです。今後も形を変えて関係が続くのを楽しみにしています。

私の人生は、モルティエ氏の死で変化しました。今、私には音楽こそが、自分の精神を高めるのに重要なのです。今後の人生も全てを音楽に捧げ、音楽を通して接する音楽家、聴衆、関係者に、私の全てを音楽に込められればと思います。今後のハンブルク響でも読響と培ったことを活かします。も

う私は若くないので、目の前のことを一つずつ大切に取り組むつもりです。音楽で世界は変えられません。しかし、音楽なくして世界は良くならないと思います。だからこそ、これからも音楽で希望を持たせられたら嬉しいです。

——最後に日本のお客様にメッセージをお願いします。

この9年間、来日することが毎回楽しみでした。楽団員に会うことと同様、お客様に会うことを心待ちにしていました。珍しい曲目の時も、期待を胸に会場に来てくれました。お客様から温かな拍手やブラボーの声を頂いた時は、本当に嬉しかった。常任指揮者を退任することに悲しさを感じないのは、またお客様にお会いできるからです。決してお別れではありません。今後も音楽を共有していきましょう。

カンブルランと歩んだ9年間

2010年から9年間、マエストロは数えられないほどたくさんの素敵な音楽を届けてくれ、心が震える時間を共有しました。その思い出を、写真とともに振り返ります。ありがとう、カンブルラン！



◀ 2010年5月1日、就任披露演奏会より

▼ 2012年8月6日、広島特別公演 終演後に広島平和祈念合唱団と



▲ 2015年9月6日、高水準の演奏を達成した〈トリスタンとイゾルデ〉公演



◀ 細川さんと終演後楽屋で

シルヴァン様

長い間、読響の常任指揮者として、たくさんの素晴らしいコンサートを本当にありがとう！ あなたのよく考え抜かれた素晴らしいプログラミングは、曲目が相互に呼応しあい、新しい音楽空間を創造します。そして、丹念に勉強したスコアリーディングによって生みだされる指揮は、どんなに聴き慣れた音楽も、全く清新な生まれだばかりの音楽として魅せるのです。あなたの演奏から僕はたくさんのことを学び、啓発されました。これからもどうぞお元気で、そして日本にもたくさん来て、演奏してください！

作曲家 細川俊夫

親愛なる挑戦者 シルヴァンさんへ

アイスランドの火山問題でほとんどの音楽家が来日を断念する中、就任披露演奏会にあらゆる手段でやって来て颯爽と指揮し、お客様に「最善を尽くすことを約束します」とスピーチした我がボス！ 通常のレパートリーでも情性で演奏する姿勢を嫌い、いつも新しい目、耳で読響を牽引して下さい。そして、どんな時も笑顔で立ち向かうその背中に、常任指揮者とはかくあるべきということを学ばせてもらいました。また素敵な音楽を聴かせて下さい。有難うございました！

指揮者 下野竜也



▲ 2017年11月26日、〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演より。喝采を浴びたカーテンコール（上）、終演後の舞台裏にて（下）



▲ 2015年3月8日、ブリュッセル公演 酒井健治作品カーテンコール



▲ 〈アッシジ〉の打楽器分奏で楽団員と話し合う様子



▲ 読売ランドで下野さんと「太鼓の達人」を楽しんだ

▼ 2015年3月3日、ワルシャワ公演にてコンサートマスターと談笑



心に残るクラシック

竹森俊平——③〈最終回〉

Shunpei Takemori

レオンハルトのバッハ

バッハ：ヨハネ受難曲



1970年代にバッハのカンタータ全曲の録音という大事業で協力したニコラウス・アーノンクールとグスタフ・レオンハルトだが、その後、異なった道を辿った。アーノンクールが手勢の古楽器アンサンブルを率いたウィーンにおけるチクルスでは、演奏前の彼の解説も楽しみだった。ベートーヴェン交響曲第5番〈運命〉について、「この曲は初めから終わりまで政治ドラマと解釈するほかない。最終楽章のホルンによる第2主題は、『ヴィーブ・ラ・リーベルター（自由万歳）』と歌っており、ナポレオン礼賛だ」（プロメテウス神話を主題とする〈英雄〉交響曲は、ナポレオンとまったく無関係とアーノンクールは断言する。）

19世紀には、政治的自由の象徴として崇拝されたナポレオンだが、国民皆兵の仕組みを導入して戦争を巨大化し、1803年から12年に及ぶ絶え間のない総力戦を主導することで欧州大陸

を破壊し尽くしたのも彼だった。ハイドンの晩年からベートーヴェンの壮年にわたる交響曲の完成期は、ナポレオン戦争にびたりと重なる。いくつかの主題が論理的に展開され、葛藤し、解決にいたる交響曲のスタイルは、戦争論理の芸術への反映でもある。晩年のアーノンクールは、そこから生まれるマグマ、とくにベートーヴェンの音楽のエネルギーに魅了されていた。

レオンハルトは戦争が巨大化した時代に背を向けた。彼の晩年のレパトリーを見ると分かるが、18世紀後半からの音楽には興味を失ったように見える。バッハは演奏したが、得意のフルートを抱えて戦場に赴き、戦略に明け暮れたフリードリッヒ大王とバッハが邂逅する18世紀半ばあたりからの作品は、あまり取り上げなくなった。

レオンハルトで忘れたい思い出がある。2002年の3月、ミラノの教会で彼が〈ヨハネ受難曲〉を指揮していた時、

第2部に入ってから聴衆の一人が心臓発作を起こし、倒れ込んだのだ。客席に背を向けた指揮者は事情を知らずに演奏を続けたが、客席を向いたメンバーは明らかに動揺していた。たまりかねた主催者の女性がレオンハルトに近寄る。その姿を認め彼は一瞬笑みを浮かべたが、事情が判ると、いつもアンコールの時にする「仕方ない」と両手を横に広げる仕草をして演奏を止めた。

やがてサイレンを消した救急車が到着し、救護隊員が患者を診て、首を横に振った。その間、聴衆は完全な沈黙を守っていた。声を上げる者も、患者をのぞき込む者もなく、教会の儀式が執り行われているような厳粛さが支配した。指揮者も客席を一度も振り返らず、スコアに向き低頭していた。「みんな、教会で死ねれば幸せと考えているのね」と、家内がつぶやいた。

患者が運ばれた後、何事もなかったように演奏再開。いや、そこからが一層凄かった。レオンハルトは一声部一人という小編成の合唱を用いた。教会の空間ではいささか幽き響きになる。だが、はっきり聞き取れる一人一人の声に込められた品位の高さに打たれた。音の織り込みが透明に聞こえるように、こうするのだろうが、何よりも大合唱の音量が頭の上から降ってくるのは「国民戦争時代の美学」で、彼の音楽観にそぐわないのだろう。



グスタフ・レオンハルト（1928～2012） ©Wikifalcon

レオンハルトが最後に日本を訪れたのは2011年5月。その2か月前に起きた地震、津波、原発事故のせいで、海外演奏家のキャンセルが続く中、何事もなかったように来日し、舞台に立った。動揺する世情の中、いつもと少しも変わらない彼の謹直な姿に勇気づけられた。翌12年の1月に癌で死去したから、最後の日本公演と悟っていただろう。幸い、チェンバロとオルガンを演奏した東京の4回のコンサートは全部聴くことができた。

剣戟の響きが聞こえるような闊達なフォルクレ、^{めいそう} 瞑想的なフローベルガーなど、どれもよかったが、全演奏会の最後に演奏したバッハのアリアと変奏（BWV989）には思わず涙が出た。20代に書いた、小さな、愛らしい佳曲。レオンハルトはそれをまるで掌中の珠を愛でるように演奏した。そこには「^{けんさん} 論理学」の研鑽を積んで、理論武装した晩年とは違った、心から打ち解けたバッハの姿があった。

新鋭・鈴木優人による〈ペトルーシュカ〉でシーズン開幕！

4/4 (木) 19:00 第621回 名曲シリーズ
サントリーホール

ラモー：歌劇〈優雅なインドの国々〉組曲

ショパン：ピアノ協奏曲 第2番

ストラヴィンスキー：バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版)

指揮：鈴木優人

ピアノ：レミ・ジュニエ



鈴木優人



レミ・ジュニエ

エストニアの鬼才が指揮し、ノルウェーの名花フランクが共演

4/17 (水) 19:00 第587回 定期演奏会
サントリーホール

トゥール：幻影 (共同委嘱作品／日本初演)

ストラヴィンスキー：ヴァイオリン協奏曲

武満 徹：星・島 (スター・アイル)

シベリウス：交響曲 第5番

指揮：オラリー・エルツ

ヴァイオリン：ヴィルデ・フランク



オラリー・エルツ



ヴィルデ・フランク

華麗なサウンドで魅了！ マイスターが振る〈展覧会の絵〉

4/27 (土) 14:00 第216回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/28 (日) 14:00 第216回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

プロコフィエフ：交響曲 第1番〈古典〉

カサド：チェロ協奏曲

ムソルグスキー (ラヴェル編)：組曲〈展覧会の絵〉

指揮：コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

チェロ：上野通明



コルネリウス・マイスター



上野通明

4 月 公演の聴きどころ

いよいよ2019年度シーズンが開幕する。4日の《名曲》は、マルチな才能をもつ鈴木優人が指揮台に上がる。鈴木は、昨年バッハ・コレギウム・ジャパンの首席指揮者に就任し、国内外の団体の公演に多数出演するほか、音楽祭での演出やプロデュース、作曲など、多方面で国際的に活躍している。ラモー作品とストラヴィンスキー〈ペトルーシュカ〉で、バロック音楽と20世紀音楽を鮮やかに描くだろう。また、ショパンのピアノ協奏曲第2番では2013年に20歳でエリザベート王妃国際コンクール第2位に輝いたフランスの若手、ジュニエがソロを担う。フレッシュな感性で奏でられる甘美なメロディーを味わいたい。

17日の《定期》は、ウィーン響などを振るエストニアの鬼才エルツが2016年6月以来、約3年ぶりに共演する。母国の作曲家トゥールの〈幻影〉(共同委嘱作品／日本初演)に始まり、武満徹、シベリウスと盛りだくさんのプログラムだ。2000年にシベリウス国際指揮者コンクールで優勝し、2011～14年にはヘルシンキ・フィルの首席客演指揮者を務めたエルツが、シベリウス交響曲第5番などで作品の神髄に迫る。ストラヴィンスキーのヴァイオリン協奏曲では、ラトルやテミルカーノフら巨匠と共演し、世界の音楽シーンで引く手あまたの名花フランクが鮮烈なソロを奏でる。

27日・28日の《マチネー》は、首席客演指揮者のマイスターが名曲〈展覧会の絵〉を指揮する。昨年カンブルラン(読響常任指揮者)の後任としてシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、先日メトロポリタン歌劇場にデビューするなど、躍進を続ける新鋭が、華麗なサウンドを響かせて手腕を発揮するだろう。また、ドイツで研鑽を積む上野通明が挑む、スペインの名チェリストで作曲家のカサドのチェロ協奏曲にも期待が高まる。

(文責：事務局)

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000

新時代へ！ 第10代常任指揮者ヴァイグレの就任披露演奏会

5/14 (火) 19:00 第588回 定期演奏会
サントリーホール

ヘンツェ：7つのボレロ

ブルックナー：交響曲 第9番

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)



セバスティアン・
ヴァイグレ

ドイツを代表する名匠ヴァイグレが振る《極上のブラームス》

5/18 (土) 14:00 第217回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/19 (日) 14:00 第217回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ロルツィング：歌劇〈ロシア皇帝と船大工〉序曲

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第21番

ブラームス：交響曲 第4番

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)

ピアノ：岡田 奏



セバスティアン・
ヴァイグレ



岡田 奏

ヴァイグレが〈英雄〉を指揮し、チェロの新星ハーゲンが共演

5/24 (金) 19:00 第622回 名曲シリーズ
サントリーホール

5/26 (日) 14:00 第111回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲

シューマン：チェロ協奏曲

ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)

チェロ：ユリア・ハーゲン



セバスティアン・
ヴァイグレ



ユリア・ハーゲン

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※ 初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

山田和樹が『ゴジラ』のテーマやロシアの隠れた名曲を指揮

6/13 (木) 19:00 第589回 定期演奏会
サントリーホール

伊福部昭：SF交響ファンタジー 第1番

グリエール：コロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲

カリンニコフ：交響曲 第1番

指揮：山田和樹 (首席客演指揮者)

ソプラノ：アルビナ・シャギムラトヴァ



山田和樹



アルビナ・
シャギムラトヴァ

もっと知られるべき傑作！ 小林が熱望したフランクの交響曲

6/18 (火) 19:00 第623回 名曲シリーズ
サントリーホール

ビゼー：歌劇〈カルメン〉組曲から

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番

フランク：交響曲

指揮：小林研一郎 (特別客演指揮者)

ヴァイオリン：キム・ボムソリ



小林研一郎



キム・ボムソリ

“カリスマ”大植が16年半ぶりに登場し、〈シェエラザード〉を披露

6/23 (日) 14:00 第112回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

バーンスタイン：ディヴェルティメント

パウエル：ホルン協奏曲

リムスキー＝コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉

指揮：大植英次

ホルン：日橋辰朗 (読響首席ホルン奏者)



大植英次



日橋辰朗

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00～18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <https://yomikyo.or.jp/>

芸劇&読響 春休みオーケストラコンサート

■3/27(水) 11:30 / 13:30 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：鈴木優人 トランペット：三村梨紗 ナビゲーター：中井美穂

ビゼー：歌劇〈カルメン〉から“前奏曲”

ハチャトゥリアン：バレエ〈ガイヌ〉から“剣の舞”

ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』セレクション

久石 譲：『となりのトトロ』より“さんぽ” ほか

[料金] S ¥3,500 A ¥2,500 こども(3才以上小学生まで) ¥1,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (10～19時/休館日を除く)

パルTAMA主催 読響しんゆり名曲コンサート

■4/7(日) 15:00 昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・ショウワ

指揮：広上淳一 ピアノ：反田恭平

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番、ベートーヴェン：交響曲 第7番 ほか

■8/28(水) 15:00 昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・ショウワ

指揮：太田弦 ソプラノ：廣田美穂 テノール：笛田博昭

プッチーニ：歌劇〈蝶々夫人〉から“ある晴れた日に”

チャイコフスキー：交響曲 第5番 ほか

[料金] 2回セット券 ¥9,400 1回券 ¥4,800 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181 (10～18時/休館日を除く)

東京・春・音楽祭2019 The 15th Anniversary Gala Concert

■4/12(金) 18:30 東京文化会館

指揮：フィリップ・オーガン

ソプラノ：ミーガン・ミラー メゾ・ソプラノ：エリーザベト・クールマン

テノール：ペーター・ザイフェルト バリトン：ジョン・ルンドグレン

バス：アイン・アンガー

チャイコフスキー：歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉より

R. シュトラウス：歌劇〈エレクトラ〉より

ワーグナー：舞台祝祭劇〈ニーベルングの指環〉より ほか

[料金] S ¥16,000 A ¥12,900 B ¥9,800 C ¥6,700 D ¥4,600 E ¥3,600

U-25 ¥2,100

[お問い合わせ] 東京・春・音楽祭チケットサービス

03-6743-1398 (平日10～18時/土日祝を除く)